OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	人間ドックの”落とし穴”
Author(s)	田口, 鐵男
Citation	癌と人. 1975, 3, p. 5-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24221
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

人間ドックの“落とし穴”

常任理事　田　口　鐵　男*

毎年春4～6月は定期健康検診の季節である。何処の職場・学校においても型通りの検診が行われている。最近では結核を中心とした検診から，次第に成人病を中心としたものに変化しつつあることは大変結構なことである。

一方で成人病が大きな社会問題になってから，人間ドックというのが流行になってきた。とくに多忙な社会的立場にある人々には人気があるようである。人間ドックというのはいうまでもなく，船がドックに入って点検し悪いところがあれば修理するという発想から来ている。したがって，人間にあてはめてやるということは大変意味のある，すばらしい制度である。人生何十年という間，身体の重要臓器は，それこそ昼夜をわかたず働きつづけて来ているのであるから，ときどき補修点検し，手入をやらねばならないことは当然である。

私ども外科医にとっては，安全に手術を施行し患者を救命するということが，もっとも大切なことである。ことに癌などの慢性疾患においては手術のため患者さんの命を失うということはあってはならないことである。

そこで，術前に何日もかけ，いろいろと検査をして手術の適応，術式とかタイミングといったものをたてる。すなわち，患者さんが手術を受けるにあたっての危険度というものを外科的リスクといって慎重に判定し，それに対する対策をたて，あらゆる準備をしてから手術にとりかかるようにしている。

この外科的リスクというものは年代別にみてみると，矢張り高令化とともに次第に大きくなっている。40才をすぎると何らかの故障を発見する率が高くなり，50代，60代とすすむにつれ，その率はさらに高くなり，65才頃からは60～70％以上の人が身体的に老化，ないしは機能の低下にとどまらず故障をもっていて，その程度が重くなっているのがはっきりしている。このことは術後の合併症，例えば胃の手術の後に肺炎などをおこすといったケースが多くなることと大いに関連している。

このように，人生高令化とともに矢張り知らず知らずの間に何らかの故障がおこっているのであるから，年に一度位はドック入りしてチェックして貰うことは，いろいろな意味で大切な，そして有意義なことであるといえる。

このようなことから定期的な健康診断を受けることは如何に大事かということが十分お解り願えたと思う。

しかし，人間ドックという制度が日本に定着して20年ばかり経過してみると，問題もあるようである。

人間ドックの検査というものは，某月某日における，その人の検査データなのである。そのときには，少しも異常はなかったかも知れないが，帰ってから胃ガンが発生し，急速に進展することだってありうることである。

これを防ぐためには定期的にドック入りするのが一番なのであるが，多くの人は異常なしといわれると，もはや半永久的に無罪放免されたかのような錯覚を起こしてしまうようである。このことはドックの大きなマイナス面であるといわねばならない。

もう一つ，人間ドックに入り検査を受けて，異常ないと告げられると，身体のすべての臓器が全く正常で本当に健康体であるかのごとく思い込んでしまうことも危険である。何故ならば人間ドックでかなり精密に検査しても，現代の医学ではまだまだ未知のことも多々あるのである。したがって，人間ドックの有用性と限界というものを認めながら，活用するようにしなければならない。医師もその辺の実情を説明しておかねばならない。

* 大阪大学教授（微生物病研究所附属病院外科）